

平成二十八年二月十日発行  
皇學館論叢第四十九卷第一号 抜刷

研究ノ一ト

丹羽文雄の宗教小説への転向とその背景

―その動機と作品「青麥」への反映―

河 合 重 好

## 丹羽文雄の宗教小説への転向とその背景

—その動機と作品「青麥」への反映—

河合 重好

### □ 要 旨

文筆活動の途上において、宗教小説的テーマとした作品に転向したといわれる丹羽文雄の作品には、作者の熟年期に発表された「浄土真宗もの」といわれる六作品がある。

これらの作品はいずれも寺院を舞台に男女の愛欲を主題とした倫理的な罪やその背景に対し、親鸞の「罪の救済」についての宗教的教義（浄土真宗の根本思想である他力本願）が作品の随所に引用され、宗教色の強いものとなっている。

本稿では、この作者の転向に焦点をあて、どのような心の軌跡がその背景となっているのかを、作者の人生体験から明らかにするとともに、転向後の第一作である「青麥」における罪の救済に対する宗教描写をみることにより、作者の親鸞思想に対

する見識がどのようなものであったかを中心に考察を試みたものである。

### □ キーワード

罪の救済 浄土真宗 自伝性 人生の挫折 仏眼

はじめに

宗教小説的テーマを追究してきた作家といわれる丹羽文雄の作品には、作者の熟年期に発表された「浄土真宗もの」といわれる六作品があり、その内訳は、発表年代順に、『青麥』（昭和二八年一二月、文芸春秋新社）、「菩提樹」（昭和三〇年一月

一六日〜三二年一月二二日、『週刊読売』、『有情』（昭和三七年一月、『新潮』）、「一路」昭和三七年一〇月一日〜四一年六月一日、『群像』、『肉親賦』（昭和四四年一月、『群像』）、『無慚無愧』（昭和四五年三月、『文学界』）となっている。いずれの作品も、寺院を舞台に男女の愛欲を主題とした倫理的な罪やその背景に対し、親鸞の「罪の救済」についての宗教的教義（浄土真宗の根本思想である他力本願）が作品の随所に引用され、宗教色の強いものとなっている。

なお、数ある宗派の中で、なぜ作者が親鸞思想を主軸とした作品を展開しているかについては、本稿第三章「作品の自伝性」で触れるように、作者の出自と深い関係があり、家庭内の出来事と、その修羅場の体験が密接に関与している。

また、作者の文筆履歴を辿ってみると、作者は、これらの作品を発表する以前に、二〇代から始まる長い文筆生活を通じ、「生母もの」、「マダムもの」といった作品を手始めに、比類のない数多くの作品を残している。しかし、熟年期に至り、初めて、前記六作品にみられる本格的な宗教小説に開眼していった経緯をもっている。ここに、風俗小説からの脱皮ともいわれるように、作家生活の中に、宗教小説を織り込む大きな転機があったものと推察される。

本稿では、その視点にたつて、浄土真宗の末寺に生まれなが

丹羽文雄の宗教小説への転向とその背景（河合）

ら、宗教は文学の邪魔になるとの判断から親鸞を否定し、文学の道を選択した丹羽文雄が、後年になって宗教に回帰し、丹羽文学の集大成といわれる「親鸞」（昭和四〇年九月一四日〜四四年三月三一日、『サンケイ新聞』）や「蓮如」（昭和四六年一月一日〜五六年六月一日、『中央公論』）といった宗教小説の大作を完成させる至った作家生活の生涯を顧みると、これら六作品は、作者の宗教に対する態度を知る上で、重要な位置を占めるものと考えられる。ここでは、宗教への拒絶観をもって、文学の道に入った作者が、どのような過程を経て、宗教小説に転向するに至ったかを、検証するとともに、その結果、転向後の第一作ともいえる「青麥」の宗教描写に、作者の親鸞思想に対する見識がどのような展開されているかを中心に考察を試みたものである。

### 一 作者の宗教に対する心の軌跡

本章での【初期における宗教に対する拒絶観】及び【小説道の挫折と立ち直り】に関する作者の言説は、「青麥」発表と同時期に開催された文藝講演会での「私と人生観」と題する講演内容に依拠した。<sup>2)</sup>

### 【初期における宗教に対する拒絶観】

作者丹羽文雄は、小説家を志し、二十九歳で、僧籍を義弟に譲り、実家（四日市の真宗高田派末寺の宗顕寺）を離れるときの宗教に対する拒絶感を、後年になって、次のように回顧している。

家を出るときに、私の小説の世界というものは現実だけだ。現実があればほかのものはいらないんだと、自分は親鸞の流れを汲んだ寺に生まれた男だけれども、親鸞なんかじゃまになる。もしも私が現実の問題にぶつかって書くときに、親鸞をもし書いたならば、私の小説はだめになるのだ。現実にはぶつかって現実と対決して、もうそれだけでいいのだ。作家が宗教だとか、哲学というものに頼ったら、作家はだめだ。自分はリアリズムの作家と思っておりましたから、親鸞なんてくそ喰らえという調子で飛び出しました。私は坊主の間に親鸞の書いたものは読みました。たくさん読んだのですが、事実言葉の深い意味というものを考えたことはなかった。

### 【小説道の挫折と立ち直り】

それから二十年間の東京での作家生活を経て、本人が四十九歳になった時の心境について、次のように述べている。

私は宗教というものは決して今は軽蔑はいたしておりま

せん。現実だけで小説はたくさんだと思っていた。私の今のまでの人生観、つまり私の小説道というものが行き詰ってそこで血路を開いてくれたのが、目に見えない世界です。この目に見えない世界というものが目の見える世界と同様に人間に尊ばれているということがやっと気がついた。

さらに、その背景として、一步も小説が書けなくなったという「挫折感」とそこからの劇的な「立ち直り」の経緯について次のように告白している。

まず、挫折については、妻を苦しめながら、飽くことない女性遍歴を続ける男をテーマとした小説を執筆中、この男を二度と罪を起さないよう改心させるにはどうしたらいいか、そのためには、「この男が徹底的に苦しまなければならぬ。それじゃどうして苦しむか、この苦しむ方法が私にはわからなくなってしまった」

と述べ、さらに、「何か罪を犯して、もちろん法律的な罪じゃない罪を犯したときに、罪の意識というものを一体私自身がどう持ったらいいかという問題を自分に向けたときに、私には答えが出なかった。そんなこと考えたことなかったのです。小説は行き詰ってしましまして、五万枚も書いた私のこのよく仿いでくれる手が進まなくなった」と告白している。そして、立ち直りについては、次のように述べている。

ボンヤリ人間が苦しむのはどういう方法だというようなことを漠然と考えていた。そのときに何のつぎ穂もなく頭にポカッと浮かんで来た言葉がある。それは無慚無愧の極悪人という言葉です。つまり自分に対しても恥を感じない、天に対しても恥じない、それほど著にも棒にもかからない悪い人間だという言葉、無慚無愧の極悪人、自分は、そういう人間だという自覚の底に徹すればいいじゃないかということがフッと私の頭に浮かんだ。

(中略)

なかなか自分は著にも棒にもかからない無慚無愧の極悪人だというような自覚を持つことができない。しかし、その意識を徹底することが苦しむことだ。こう私は気がついて、やっと小説が書けました。

(中略)

この言葉は一体だれがいい出したか、私があれば嫌がってそのために飛び出した坊主生活の中にあつた言葉です。親鸞がいつた言葉であつたのです。

(中略)

この言葉は親鸞が七百五十年前にちゃんといつておる。七百五十年前に人間の苦しむ方法をちゃんといつてくれている。いた。

丹羽文雄の宗教小説への転向とその背景(河合)

と述べ、ここでの「無慚無愧の極悪人」という言葉に対する作者の認識は、一般的な倫理観の視点から、罪を犯す悪人を糾弾し、善人回帰への動機付けとして、解釈されている。

しかし、この言葉は、本来、人間の根本的本質を表象するために、親鸞が用いたもので、親鸞思想では、それが即、苦しむことの方便にはなっていないことが、次のような親鸞思想の本質と比べると明らかである。

親鸞思想の本質は、私たちは弥陀の誓いによつて浄土に迎えられるのであつて、念仏行者は、もはや善いとも悪いとも考える必要はなく、苦しみの有無とは無縁のものであり、人間の分別が関与するものではないといつた救済観となつており、また、魂のすくいと信心に対して、一般的に、どの宗派にも共通すると考えられる「宗教とは、自力的に、救いを求めるものといつた普遍的な考え」を根本的に否定しており、ここに、自力を否定した浄土真宗特有の「他力本願」が思想の中心となつている。従つて、ここでの作者の言説は、「善人なを持つて往生をとぐ、いはんや悪人をや」といつた「悪人正機説」や「あるがままでよい」といつた浄土真宗の基本思想とは、明らかに乖離しており、ここは、教義とは離れた作者独自の倫理観(常識的な善悪判断)になつているものと考えられる。

## 【親鸞思想への接近】

そして、親鸞思想への接近を次のように述べている。

私の書庫は、親鸞に関係する書物で埋まるようになっていた。他の書物は別の場所に移した。夜更けまで私が読書していることがあれば、それは親鸞に関係した書物に向かっているときであり、飢えた人のようであった。<sup>(3)</sup>

と供述し、徹底した親鸞思想への接近体験を告白している。

## 【信仰に対する自己評価】

以上のように、この時期、作者自身が親鸞思想への造詣を深めていき、その見識をもとに、その後の作品の随所に親鸞思想が展開されるに至っているが、一方、作者自身の実生活と親鸞思想を対比し、信心を深化させていくことの困難性を次のように告白している。

作者が後年になり、子供の頃（八歳）に得度を受けた高田の専修寺を四二年ぶりに訪れ、本堂に座ったときの心境について次のように述べている。<sup>(4)</sup>

私は誇るべき何ものもない。いまこうして佛と対座しているが、五〇年にわたる自分の生涯は、いかにも中途半端なものであるという考えが強かった。佛の前では、強がりもできない。うぬぼれの底を見すかされてしまう。なにごとくもかくしようがなかった。私は親鸞の言行録を読んでい

る。頭で理解している。心を打たれている。そのくせ、理解してきたことのどれだけを私が実行しているだろうか。何も実行していないと言つてもよいのである。煩惱にとらえられて、わたしは不信をはたらいっている。親鸞は決してむつかしいことを私たちに命じなかった。そのためことさらやさしいことを、くりかえし教えているのだが、そのやさしいことが、私には実行できないでいる。無慚無愧の極悪人という自覚は、いうはやさしいがとても実行の出来ることではない。

と告白し、入信に対する作者の姿勢がどのようなものであったかを知ることができる。

## 二 作品「青麥」への親鸞思想の展開

先ず、最初に、作者が宗教小説を展開するにあたり、どのような立場で、とりくんできたのか、作者自身、「青麥」より一二年遅れて発表された「親鸞」のあとがきで次のように述べている。<sup>(5)</sup>

私は歴史家ではない。宗教学者でもない。人間性を追究することを仕事の場としている文学者にすぎない。

【浄土真宗もの】に引用されている宗教教義】

仏典	著者等	作品
一念他念証文	親鸞	青麥
一枚起請文	法然	菩提樹
教行信証	親鸞	菩提樹
口伝鈔	覚如	青麥
正像末和讃	親鸞	菩提樹・有情・一路
歎異鈔	唯円	菩提樹・有情・一路
大藏經（相応部）	佛教典籍籍	菩提樹
末燈鈔（自然法爾）来	從覚	青麥・菩提樹
唯信鈔	聖覚	菩提樹

と述べ、身を外において宗教とは一線を画しているが、作品の内容や前述の【親鸞思想への接近】での言説から判断すると、浄土真宗に関し、相応の造詣があったことは疑う余地はなく、文学者としては、親鸞の自著を中心に、前表に示したように、かなり深い見識をもっていたことが窺われる。

（一）「鈴鹿の疑念」への宗教描写

作品「青麥」は、作者が実父をモデルとして、住職（如哉）に託し発表したものであり、一人娘（郁・一六歳・のちの鈴鹿

丹羽文雄の宗教小説への転向とその背景（河合）

の実母）の「いいなずけ」として、養子に入った如哉が未亡人となっていた祖母（須磨）と性的交渉をもち、のちに、そのことを知った若い妻（郁）は、子供（鈴鹿）を残して、家出する。精力旺盛な如哉は、寺に出入りする何人かの女性たちとも、次から次へと関係をもち、道徳的な罪の意識に苛まされながらも、ありのままの自分のみつめ、そこから解脱できない自分が救われないことに苦悩しながら、次第に、自力による救済依存を断念し、「他力本願思想」に傾斜していく姿が描かれている。この中で、作者の宗教に対する見識を知る上で、重要と思われる文脈として、息子鈴鹿が父親如哉を見る目として、次の描写に着目したい。

如哉は、数々の女性遍歴を重ねながら、一方、平然と念仏をあげている。息子の鈴鹿は、いったい、情欲と念仏をどう調和させているのだろうかという思いに取りつかれる。ほんとうに信心を得たならば、人間はすぐわかれると鈴鹿は考えていた。すぐわれたことは、実証されなければならなかった。客観性をともなわなければならなかった。つまり救われた人間は、とたんに善意にあふれた人間と生まれかわり、たれの目にも、すぐれた人間であることが証明されねばならなかった。それなら鈴鹿は納得できる。かれは魂のすくいか、信心という、いわば非現実的な問題を、

現実的な感覚で、理解しようとかかった。<sup>⑥</sup>

と述べており、「ほんとうに信心を得たならば、人間はすぐわかる」と鈴鹿は考えていた」が、それは「非現実的な問題を、現実的な感覚で、理解しようとかかった」と描写しており、ここに、作者の「青麥」発表時の信仰に対する心の推移を窺うことができるものと考ええる。

しかし、ここでの作者の描写については、後述の「如哉の晩年における回想」のところとも共通するが、筆者として、かなり強い違和感を感じるところである。

ここでは、作者は、「自力救済」を現実的、「他力救済」を非現実的といった概念で、分別しているが、本来、自力であろうと、他力であろうと、現実世界での救済思想の違いから生ずるものである。従って、他力救済に非現実的という言葉を使うことは、現世では到達できない境地といったイメージを与え、今生での心の拠りどころとは無縁のものとして扱うことは、本来の姿から遊離しているものと判断される。ここは、宗教的には、「目に見えない世界への開眼」とか、さらに、他力思想からみて「思慮分別を超えた」といった文言が適切ではないかと思われる。

しかし、作者はあえて、登場人物である住職（如哉）が社会的地位を忘れ、愛欲に耽る姿に対する救いへの絶望性を示すた

め、作者独自の倫理観として、もはや、いかなる宗教も救えないのではないかといった作者の感情を込めて、あえて「非現実的」という表現を使ったものとも考えられる。

## （二）「如哉の晩年における回想」への宗教描写

さらに、如哉の晩年における心境として、次のような描写がある。ここで、作者は、作者自身の宗教への接近を如哉に託して述べているものと考えられる。

七十年ちかい僧侶の生活は、救われるどころか、救われない人間であることを徹底的に思いしらされた。若い時代には、入信すれば安心が得られ、救われると思った。たしかな思惑があった。そのように努力した。が、煩惱を一度でもさっぱり殺したことがあったろうか。かれは自分が、獷猛な情欲のとりこになって、飽くことを知らない人間であることを知っただけである。七十年の生涯がそれを知らせてくれた。その自覚が、僧侶であるだけに、人にはもたせず、都合がわるく、皮肉を極めた。それだけの相違であった。大きな相違だったようである。

（中略）

如哉はある時代、救われたいとねがい、それにはどのような心の修業をすればよいかと切なく問題にした。その後



は、救われる証拠をわが身に立証するという努力はやめてしまった。問題のとりあげ方がまちがっていたと気がついた。如哉は非現実的なたれかの目を現実的にうけとれるようになっていた。<sup>(7)</sup>

と述べ、入信の条件と考えられる「仏眼」への目覚めが描写されており、信心の境地の入り口に到達した表現となっている。

このような如哉の生き様に対し、作者は次のように、「一念多念証文」に記されている仏眼への接近を描写している。

ある明晰な目が、そんな如哉をじっと見まもっているようであった。その目は、如哉を叱りつけはしなかった。こうしろとは何も示しはしなかった。その目は怒らなかつた。冷淡にもならなかつた。如哉には、その目を感じる事ができるようであった。その目は、如哉の感情や意志を束縛しなかつた。現世的には力のない目であった。如哉が一心に念仏を称える姿勢を、その目はじっと眺めている。その目は大慈大悲の永遠の凝視であった。仏の目であった。「一念多念証文」にも説かれている「大悲ものうきことなくして、常にわがみをてらす」の仏眼である。如哉は、その眼を感じている。その眼は、如哉の矛盾を、その煩惱を、その罪過を凝視している。凝視に応えるものは、如哉の戦慄であった。永遠の戦慄といつてもよい。<sup>(8)</sup>

丹羽文雄の宗教小説への転向とその背景（河合）

と述べ、「弥陀の大悲は倦きることなく、常にわが身をてらしたもう」という、入信に必要な仏眼への自覚を説いている。

なお、この有名な文言は、浄土真宗の源流である源信の「往生要集」が本邦初出であり、さらに、親鸞が「一念多念証文」の中で述べているが、いずれも目の表情についてはいっさい言及しておらず、このように、多様に脚色した表現は、作者独自のものである。

この点に関し、中野恵海は、次のように述べている。<sup>(9)</sup>

如哉の極彩色なまでの煩惱の姿の上にこの凝視をもつて来た事一つで、「青麥」は近代文芸の一異色たるを失わず、他の追従を許さぬ「創作」として独自の位置を占めるものと私は思うのである。

以上、みてきたように、鈴鹿の「信心とは何か」という素朴な疑問から始まり、さらに、晩年になって、煩惱からの解脱を断念し、次第に他力本願へ帰依していく如哉の姿が描かれている。ここに、作者は登場人物の心の変遷に託して、作者自身の宗教に対する最初の態度とその後の深化・変容を描写しているものと考えられる。

### 三 作品の自伝性

「青麥」は、他の五作品と同様に、寺院を舞台に男女の愛欲を主題とした倫理的な罪やその背景に対し、親鸞の「罪の救済」についての宗教的教義（浄土真宗の根本思想である他力本願）が作品の随所に引用され、宗教色の強いものとなっている。

ここでは、なぜ、作品の舞台が寺院での人間模様になっているのか、また、数ある宗派の中で、作者がなぜ、鎌倉新佛教の一つである浄土真宗の世界を展開しているのかについて、その背景を明らかにしておきたい。その理由は、次に示すように、作者自身の私生活と密接に関係していることから理解できる。

先ず、丹羽文雄の「生い立ち」<sup>(9)</sup>について、村松定孝は次のように述べている（要点のみ箇条書き）。

(ア) 丹羽文雄は、一九〇四年、真宗高田派末寺である四日市の宗頭寺の長男として生まれたが、廃嫡して小説家となった。

(イ) 実父は名古屋から養子として入り、寺の再興に貢献したが、祖母と不倫関係をもった。

(ウ) 実母は、それを知って、文雄が八歳のとき、旅役者を追って家出し、そのあと、継母を迎え、異母弟が

できた。

以上の作者の生い立ちと「青麥」の作品構成を比べてみると、非常に強い自伝性のあることがわかる。

このように、宗教的テーマを追究してきた作家といわれる源泉には、生家が浄土真宗の寺院であったこと、さらに、祖母と実父（養子）の不倫と実母の家出という家庭内の修羅場を体験したことの二つの運命的な出会いが大きく影響していることが推察できる。

### おわりに

以上、作者の宗教小説への転向後の初期作品（六作品）の一つである「青麥」は、「救い」が、全篇を貫く最大のテーマである<sup>(11)</sup>ともいわれるように、宗教色の強いものになっている。

本稿では、作品の源泉となっている作者自身の「宗教に対する態度」がどのようなものであったかについて焦点を絞って、その考察を試みた。その要点を述べると次のようである。

先ず、作者の「宗教に対する態度」が作品中の登場人物の行動に投影されているという立場に立って、「青麥」の描写をみると、本稿第二章第一節「鈴鹿の疑念」への宗教描写で触れたように、「信心」という、いわば非現実的（この語の妥当性に

いては、既述参照)な問題を、現実的な感覚で、理解しようとかかった」といった言説や同第二節「如哉の晩年における回想」への宗教描写で触れたように、「如哉はある時代、救われたいとねがい、それにはどのような心の修業をすればよいかと切なく問題にした。その後は、救われる証拠をわが身に立証するという努力はやめてしまった。問題のとりあげ方がまちがっていたと気がついた。如哉は非現実的なたれかの目を現実的のうけとれるようになっていた」といった言説からわかるように、いずれの場面でも、自力による悟りや救いを断念、放棄し、他力救済を志向する姿が描かれている。とりわけ、「如哉は非現実的なたれかの目を現実的のうけとれるようになっていた」という描写は、作者自身の信心の境地への接近を窺うことができる。

一方、著書のあとがきや講演会での作者自身の言説に着目すると、次の二点から、入信の境地には達していないことが明らかである。

まず、作者は、既述のように、「私と佛教」の中で、「私は親鸞の言行録を読んでいる。頭で理解している。心を打たれている。そのくせ、理解してきたことのどれだけを私は実行しているだろうか。何も実行していないと言ってもよいというのである」と告白しており、さらに、作者は、晩年の大作「親鸞」のあとがきで、「私は歴史家ではない。宗教学者でもない。人間

性を追究することを仕事の間としていた文学者にすぎない」と述べているように、生涯、入信とは一線を画していたことが明白である。

次に、「青麥」はじめ、六作品には、前掲したように、親鸞教義が陰に陽に駆使されており、作者の浄土真宗への関心の強さと教義への理解の深さを知ることができる。

最後に、以上述べた諸点から、本稿の主題とした、「作者がどのような経緯を辿り、宗教小説に転向したか、また作者自身の宗教に対する態度」がどのようなものであったかについては、次のように結論付けたい。

人は人生において、何度も挫折を体験するが、小説家を生業とする作家丹羽文雄の場合には、文筆活動の行き詰まりであった。そして、そこからの立ち直りは、かつて浄土真宗の僧籍にあったころ、人間の本質を形容する「無慚無愧の極悪人」という親鸞の言葉との遭遇であったと述べている。

しかし、作者自身は入信の立場にないため、入信すれば、どのような心的状態に到達できるのか、また、どのような魂の安寧を得ることができるのかなどには、言及されていないが、これを糸口として開花していった親鸞思想が「青麥」はじめ、その後の作家生活を通じ、宗教的立場から作品を展開し、文学界に新境地を開拓するに至ったものと判断される。

(注)

(1) 武田友寿は、「宗教の救済と文学の救済」『国文学 解釈と鑑賞』三九巻 第八号(一九七四年七月) 四四頁で、次のように述べている。

丹羽文雄はもつとも切実に宗教的テーマを追究してきた作家である。『一路』三部作といわれる「青麥」「菩提樹」「二路」はそのテーマを極限まで深化・展開したものであつたらう。これに「無慚無愧」を加えた四作は、戦後日本文学に現代文学のなかでもつともすぐれた宗教小説であるといつてよいであろう。

(2) ここでの作者の言説は、相愛學園創立六十五周年記念行事として行われた文藝講演会(昭和二八年一月二日、大阪中ノ島中央公会堂)での「私と人生観」と題する講演の録音テープから速記録として、収録されたもので、後の相愛學園からの出版物『文学と人生』(昭和二九年七月大谷出版社)七五頁、八一〜九〇頁から引用した。

(3) 『親鸞』(昭和四四年九月 新潮社)の「あとがき」二二八頁。

(4) 著作者代表 亀井勝一郎『現代佛教講座 第四卷』(昭和三〇年六月 角川書店)、「私と佛教」二五四〜二五五頁。

(5) (3)と同書物二二七頁。

(6) 『丹羽文雄文学全集』第三卷(一九七四年九月 講談社)三五八頁。

(7) (6)と同書物 三九〇・三九五頁。

(8) (6)と同書物 三六五頁。

(9) 中野恵海「丹羽文雄と親鸞(下)」—小説「青麥」を中心として—『相愛女子短期大学研究論集』四巻二号(一九五七年一〇月) 一一七頁。

(10) 村松定孝「丹羽文雄論」『明治大正文学研究』第二五号(昭和三三年一月) 七一頁。

(11) (9)と同書物。中野恵海は、一一九頁で次のように述べている。

如哉が救われたかどうか。之は青麥全篇を貫くテーマである。誠に途方に暮れる様な難問である。誰も之に答える事は出来ないであろう。丹羽がこの一篇を通じて我々の前にそれを提出し、身一杯に叫んでいるところのものは実にそれなのである。

(かわい) しげよし・皇學館大学大学院博士後期課程)